第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

カテゴリー	シンポジウム
タイトル	小児在宅医療の展望ー医療と福祉の協働による新しいコミュニティーの創造
日　　時	平成 25 年 3 月 30 日　14：00～17：10
会　　場	サブホール
演　　者	ひばりクリニック･高橋 昭彦先生、あおぞらネット･梶原 厚子先生、社会福祉法人むそう･ 戸枝　陽基先生、伊予病院小児リハビリ･藤田 正明先生、子ども在宅クリニックあおぞら診療所墨田･ 前田 浩利先生、島田療育センター　はちおうじ・小沢 浩先生、心身障害児総合医療療育センター・むらさき愛育園・北住 映二先生
企画趣旨	小児在宅医療の重要性が高まっている。その背景に、在宅医療の対象となる子どもの急速な増加がある。我が国の新生児医療は、世界一の救命率を誇り、全国で小児集中治療室（PICU）の整備が進み、救急でも小児の救命率は向上している。一方で、救命した子どもの中には、人工呼吸器などの医療機器に依存して生活する子どもがいる。このような子ども達は退院できないまま数年、場合によっては 10 年以上にわたって病床を使っている。特に NICU の問題は深刻で、「NICU 満床問題」として社会的にも注目された。その結果、NICU の長期入院を減らそうと様々な試みが行われ、長期入院児は減りつつあるが、人工呼吸器を装着したまま退院し、自宅に帰る子どもは年々増加している。また、気道狭窄に対して乳幼児期から気管切開を行い、気管カニューレを使用する子ども、短腸症候群への高カロリー輸液や原発性肺高血圧症に対する肺血管拡張薬の持続投与などのように、中心静脈カテーテル管理を自宅で行う子どもたちも増えている。 しかし、社会資源の整備は著しく不足し、このような医療依存度の高い超重症児が、家族の力だけで在宅療養を送っているのが我が国の現状である。このような状況が続けば、家族は疲弊し、子どもの状態は容易に悪化し、入院頻度が増え、その地域の小児医療の基幹病院の負担が益々増加する。重症児、あるいは医療ケアが必要な病弱児を地域で支えていくためには今後、地域の社会資源を整備することが焦眉の急であり、今、整備を進めなければ、小児医療そのものが崩壊しかねない。 しかし、小児の在宅医療には、介護保険のような医療と福祉をつなぎ、トータルに在宅生活を支える仕組みがない。にもかかわらず、在宅支援に関わる職種や機関は非常に多く、制度も複雑である。更に、障害児支援において、我が国では福祉と医療が断絶されている。従って、小児在宅支援において相談機能とコーディネート機能の整備が必須である。すなわち、相談、調整機能をベースとしながら、訪問看護、訪問リハビリ、訪問介護、そしてレスパイトサービスが適切に組み合わさり、更に病院とも連携してはじめて、小児の在宅支援はうまく機能する。そこで、全てのサービスの共通の理念となるべきは、「子どもと家族のニーズに合わせて、福祉と医療が協働してその生活と人生を支える」ということであろう。福祉と医療が、これまでの断絶を超え互いを理解し

	合い、「子どもの命を守りつつ、その生活や人生を豊かにし輝かせる」という共通の目的に向かって協働することが、小児在宅支援を成功させる鍵である。 　今回のセッションでは、医療依存度の高い在宅の病弱・重症児を支える医療と福祉の協働のあり方について提言し、小児在宅医療の新時代を切り開く突破口としたい。